

美術学習におけるクリティカルな思考と判断に関する研究

阿部靖子*

(平成18年10月5日受付；平成18年11月16日受理)

要 旨

情操教育を目的とする日本の美術教育においても、美術学習の中でクリティカルな思考や判断を育てるための学習内容を考えていくことが今後益々重要になってくる。そのために、美術批評の在り方について考察し、そこから美術学習の中で批評活動を行なうことの意味と方法について検討した。この批評活動は、単なる知識・理解に留まらず、自分の感じ・見方・考え方を常に自己批判しながら獲得していく過程と考えられ、鑑賞活動の中でさらに行なわれていかなければならない学習だと思われる。そして同時に、鑑賞活動の中に組み込まれる批評学習ばかりではなく、表現活動を含む美術学習全体にその考え方を発展させたクリティカルな思考と判断を育てる学習が、新たに想定される。例えば、イングランドのナショナル・カリキュラムが示す Art and design の学習内容には、クリティカルな思考と判断の形成にかかわる内容が多く見られ、それらが日本の美術教育の内容に示唆するところのものは大きい。

クリティカルな思考にかかわる学習は、美術教育のみならず日本の教育が課題としてあげている思考力につながるものであり、造形美術活動を通して育てていく思考力は、思考のとらえそのものを広げる可能性を持つ。そして、美的価値や質について子どもたちが判断し、互いにその判断を共有でき、新たな価値や質を形成し続けていくような学習の在り方を考えていかなければならない。

KEY WORDS

critical thinking	クリティカルな思考	judgment	判断
National Curriculum	ナショナル・カリキュラム	artistic learning	美術学習

1. はじめに

現行の小学校児童指導要録及び中学校生徒指導要録には、各教科等が共通に押さえる評価の観点として、①「関心、意欲、態度」②「思考・判断」③「技能・表現（又は技能）」④「知識・理解」の4つがあげられている。そして、この4つの観点を基に各教科等がその特性に合わせて、教科独自の観点を決めている。美術教育は、小学校、中学校とも①「関心・意欲・態度」に対しては「美術への関心・意欲・態度」、②「思考・判断」に対しては「発想や構想の能力」、③「技能・表現」については「創造的な技能」そして、④「知識・理解」については「鑑賞の能力」があげられている。これらの対応については様々なとらえ方があるとしても、「思考・判断」に対応するものが「発想や構想の能力」という語句であることは、「思考・判断」の意

* 芸術系教育講座

味が限定的にとらえられてしまう危険性がある。他教科であげられている「思考・判断」の観点を見ると、例えば「数学的なものの見方や考え方」、「科学的な思考」、「社会的な思考・判断」などと、表わされていることがわかる。このことは、実際の美術学習の中で、「思考・判断」を狭く考えていることにつながり、さらに「思考・判断」が美術学習全体にかかわる重要な能力であるという認識のなさを示していると思われる。

本研究で明らかにしようとすることは、この「思考・判断」を美術学習の中でどうとらえ、子どもたちに必要な能力としてどこに位置づけ、さらに、具体的にどのような学習活動が考えられるか、ということである。そのために「美術批評」という美術の価値・判断にかかわるジャンルを概観し、その思考過程、判断方法などを明らかにしながら、それを子どもたちの学習活動へと発展させていきたい。その際、「美術批評」を鑑賞教育の中での活動で完結させず、表現領域も含めた美術学習全体にかかわる内容として意味づけ、その内容を検討していくつもりである。

なお、「思考」を「クリティカルな思考（批判的・批評的思考）」と特定して考えていることについては、「クリティカル・スタディについての研究」として既に報告済み¹であり、それに基づいているが、加えて「批判」についての今西の指摘を引用しておきたい。今西は、

「批判」は、既存の思想や文化を告発することではないし、それらを全面的に否定し去ることでもない。それは、継ぎ目のない首尾一貫した体系であるかに見えてきた思想や文化の諸々のタイプのなかに亀裂や裂け目を見てとり、その裂け目あるいは開口部を通して、それらが隠したり排除したりしてきたものを救出することである。その意味では、批判的思考はこれまでの思想の在り方の自己批判であり、過去の思想が考えたこと以上に多くを見る眼をもつことでもある。

批判は否定的だと思われているが、そうではない。ポジティブな構築作業とおもわれている「体系的思想」のほうこそ、隠蔽や排除をしているのだから、そちらの方がずっと否定的である。批判は、隠蔽され排除されたものを救い出すのだから、こちらの作業こそずっと肯定的である。転換期の思想は、この意味での肯定的作業、すなわち、これまでほとんど開花させられてこなかった何者かを見つけ出し、育てあげる作業でなくてはならないだろう²。

と、述べている。このような見方ができることこそ、思考を重視する意味であると思われる。

ただ、本研究で「批判的」あるいは、「批評的」という言葉でなく、「クリティカルな」という言葉を用いるのは、クリティカルを「批評」と訳すことで、美術批評（芸術批評、アート・クリティシズム）という領域での考え方と、小中学校の美術教育の中でクリティカルな思考・判断を育てる学習というものを区別しておきたいからである。

2 美術批評から導かれる「クリティカルな思考と判断」にかかわる学習

2.1 美術批評の意味と方法

芸術の中で美術に関して言えば、美術分野と呼ばれるものの中には、制作や表現と同様、「美

術史」「美学」「美術理論」などが存在し、「美術批評」も、美術史や美学や美術理論と重なりながら、現在では、独自の目的と内容や範囲を持つものとなっている。

「一般に美術批評は、美術作品の価値を判断し、それをとおして人間の創造活動の本質を明らかにしようとする営み³」ととらえられている。ただ、「芸術作品に対する美的価値判断や美の理論の追求と考えれば、古来以来、美の理論家や美術史家は多かれ少なかれすべて美術批評家であったと考えられる⁴」という指摘通り、その区分はむずかしく、「美術史の中の批判的鑑賞⁵」というとらえ方がされてきた時代もあった。その中で、川田は「今日の意味での美術批評が誕生したのは、18世紀の中頃、フランスの美術アカデミーの会員を中心にルーヴル宮の一室で始まった展覧会、『サロン』展についてのディドロの美術批評においてである⁶」と述べ、この時期に頻繁に開催されるようになった個展や公募展、また新聞や雑誌のマス・メディアの飛躍的な発展が、美術批評の世界とその役割を一挙に拡大したと述べている。そして、19世紀以来の情報手段の目ざましい発達とその影響力によって、「今や美術批評は、その独自の判断で、芸術家達の歴史的な位置づけを行ない、また一人の芸術家の創造的発展の中で重要と見られる要素を拾い上げ、マンネリズムや退行を指摘することで、おのずから次に来るべき展開を示唆し、それによって積極的に芸術を方向づけようとしている⁷」と現代の美術批評の在り方についてその意義を述べている。

しかし、この美術批評の内容と方法は未だ一般的に確立されたものとなっていないため、美術史の内容の中でも特に「判断」に関する内容を重視するという点をここでは美術批評の目的としてとらえ、そのための方法について取りあげていきたい。この「判断」ということについては、石川が「鑑賞において、判断＝批評の問題は最も省みられることの少なかった部分であり、方法論的なアプローチはほとんど行なわれてこなかったといっても過言ではない」と述べているように、美術教育の中で鑑賞教育への関心の高まりはあっても、「判断」や「批評」をその中心に位置づける試みはほとんどない。従って、この「判断」に関する学習を考える上で、美術批評家が美術批評の場で行なっている判断の過程を検討していくことが有効であると思われる。

例えば、木下は、「『批評』とは、ある芸術現象に対して、解釈と批判と展望を行ない、それを言説化すること⁹」ととりあえず規定し、その上で「批評」の構造を明らかにしようとしている。それによれば、「近代の『批評』意識は、〈発端—詩—科学—領域化〉という展開構造」を持ち、「一つの対象との出会いにおいて多様な言語化の可能性をはらみながら（〈発端〉）、まず〈詩〉的表出がその出会いの感動を言語化する。次いで、その対象をさらによく理解しようとした時、その踏み込みの方法は、対象を分析しようという方法であり、すなわち〈科学〉の接近、〈科学〉言語による論理的（合理的あるいは実証的）把握の作業である。これが、ひと通りなしえた時、『批評』は言説としての形を整え、その言説の積み重ねが『批評』言語のジャンル化を促す。その時、このジャンル化された言語の群は一つの〈領域〉を獲得し、言い換えれば、一つの〈領域〉として知の活動界に市民権を獲得する¹⁰」と考えている。

一方、ダラコット（Joseph Darracott）は、美術批評は「描写、解釈、評価」から成り立つとして、描写とは、「作品そのものの描写と、批評家のその作品に対する反応の両方を含む項目」であり、「解釈は、三つのうちで最も範囲に広がりがあり、形式や様式の問題を含むもの」であり、「しかしおそらく作品の歴史的な背景、技法や主題、芸術家の個人史も含めたその他の問題が検討に加わるもの」であり、「評価は、批評家の経験においてその作品の位置

づけを行ない、読者の判断形成を手助けするひとつの集約」であると述べている。

このように美術批評が行なう作品にかかわる一連の行為（例えば、発端—詩—科学—領域化、描写—解釈—評価）は、美術独自の思考・判断の方法であり、それは子どもたちにとって他の教科では獲得できないものの見方、考え方、判断を与えるものとして意味を持つ。そして、まさに現在の急速に変化する社会、美術、芸術、環境の中で生き、成長している子どもたちにとって、同時代美術（コンテンポラリーアート）についてのクリティカルな思考方法としての「批評」活動が求められている。人類が未だ経験したことのない情報社会の中で、多様なメディアやコミュニケーションによる表現を、我々は自分の感覚を通してクリティカルな思考過程と判断を繰り返しながら、受け入れ、育てていかなければならない。

2.2 美術批評学習の実践例

ここでは、前項でみた「批評」学習について、系統的な学習を行なっている外国の例をもとに、その内容を検討していきたい。コンテンポラリーアートとその批評活動が盛んなアメリカの美術教育の中には、いくつかの理論と実際の学習内容が見受けられる。アイズナー (Elliot W. Eisner) の述べる美術学習の批評的側面、DBAE のディシプリンとしての批評と全米美術教育基準の批評に関する内容を取りあげ、考察していきたい。

2.2.1 アイズナーの3つの諸相 (productive, critical, cultural) ¹²

アイズナーは、美術の学習には多様な学習様式があるとし、美術学習を3つの諸相からとらえようとしている。すなわち、「表現的 productive」「批評的 critical」「文化的 cultural」と呼ぶ3つのものであり、それは美術形態を創り出す能力を発達させることと、美的知覚力の発達や1つの文化的現象としての美術を理解する能力にかかわるものとして、美術教育を考えるとところからきている。そして、アイズナーは批評的領域について「私たちが芸術作品とよぶ諸形態を子どもが楽しみ、経験する能力を開発することができる。この活動の領域は批評的領域と呼ばれている ¹³」とし、さらにこの批評的領域の学習には、2つのタイプの能力が含まれていると考えている。

1つは、この学習を通じて、子どもが質を見てとれるようになり、表現と鑑賞との相互の関連がわかるように視覚的感受性を発達させることである。と、いうことは、視覚的形態、特に美術作品に対して美的に反応することができるようになるということである。

2つめは、視覚形態を構成する質を言葉でうまく述べる能力である。この能力は、美術批評家によって最もよく示されている。美術批評は作品の視覚的特性に反応するだけでなく、それを適切に言葉で述べる仕事なのである。つまり視覚形態を言葉に変えるというマジックなのである。視覚形態に対する言語的等価物を見つけるという意味ではない。等価物など存在しない。批評家は言葉を用いて、しばしば詩的に質を暗示し、素養のない人が作品に意味を見出すための手がかりを与える ¹⁴

このような子どもの視覚的感受性、美的判断の質を高めるための学習と言語化する能力を発達させるという考え方は、日本の鑑賞教育が子どもたちの感受性から出発しながらも、既成の

価値概念の習得や知識の受け入れで終わってしまいがちなことに対して一つの方向を与えてくれる。

また、アイズナーは、芸術家を「深く感じたり、また内的な思考や感情さらにイメージといったものをある外的な形態に変えることができるような思考力豊かな人¹⁵⁾」と考え、「芸術家のこうした能力は、質の視覚化および統制に依存するということから、われわれはその能力を質的な思考行為とみなすことができるであろう。われわれはそうした方法を、質的問題を解釈するために質的思考を用いるもの、すなわち質的能力の行使に依存する方法とみなすことができる¹⁶⁾」と述べている。彼のいう質的思考は、クリティカルな思考と同様の意味であり、美術学習で育成される質的思考の重要性を説いているのである。

2.2.2 DBAE (Disciplined-Based Arts Education) の4つのディシプリンと全米美術教育基準

DBAEは、アメリカの芸術教育の中で近年まで広く取入れられてきた考え方であり、4つのディシプリンに基づき、芸術教育を行っていくというものである。その4つとは、Art Production (芸術制作)、Art History (美術史)、Aesthetics (美学)、Art Criticism (芸術批評)であり、ここでいうArtsには、音楽、ドラマ、ダンス、そして、視覚美術が含まれている。芸術教育の学習内容を4つのディシプリンからとらえ、その中の一つとして、Art Criticismを位置づけていることは、制作や美術史や美学の学習と同じように、批評を重視した学習が構想されているからである。現在のゲッティ芸術教育研究所が提供している考え方からこのArt Criticismの内容を見ると、「主題の識別」「認識できるものとシンボルを見つけること」「芸術作品の身体感覚的な質の描写」「芸術作品の価値の評価」の4つがあげられている。そして、例えば、最後の「価値の評価」については、「造形的完成度を判断すること」や「スタイルの『真実』とメディア使用の程度を判断すること」や「他の類似した作品と比較すること」や「革新的、社会的、道徳的な価値の程度を判断すること」があげられている。また、クリティカルな評価として、「何かが美しいことは、何を意味するか?」「醜いということは?」「悪い芸術とは何であるか?」「美しさのための基準は存在するのか?」「誰の基準か?」「どんな基準が、美しさの評価をするのに用いられなければならないか?」という内容が書かれている。

山木は、「このDBAE(1980年代)のベースには、アメリカ美術が生み出した批評の言葉を系統的・網羅的に近代・現代の美術を学ばせようとする姿勢がみられる。言い換えれば、DBAEは教材化の過程を通じて、アメリカの美術批評が編み出した言葉を美術教育の世界に導入したのである¹⁷⁾」と述べている。

しかし、現在はこのDBAEの考え方に変わり、1994年に公表されたアメリカ合衆国の全国的な基準である「全米美術教育基準 the National Visual Arts Standards¹⁸⁾」が広がりつつあり、アメリカの美術教育界の変化が少しずつ見受けられる。

この全米美術基準の中には6つの内容基準とそれを学年段階に適応させた達成基準が示されており、内容基準としてあがっているものは、「材料・技法・過程の理解・応用」「構成や機能に関する知識の活用」「一定の主題、象徴、構想の選択・評価」「歴史と文化に関連させた美術の理解」「自他の作品の特色や意義についての吟味や評価」「美術と他の教科との関連づけ」の6つである。また、基準に準拠した「能力分野 (Ability Area)」の18項目が「ゲッティ芸術教育研究所」からガイドとして提案されている。ふじえによれば、「1番目は、personal

expression と呼ばれて自己表現的な活動が中心である。同様に、2～5までは、制作の準備のための醸成過程、6～9は、制作活動とできた作品の相互鑑賞、10は子どもが自分の制作体験をもとにして美術作者の立場を理解すること、11～13は美術作品と美術制作に関する歴史的・文化的な背景を探ること、14～16は作品解釈や美術批評活動、17～18は美術に関する美学的・芸術学的な考察に相当する」ものとなっている。その14～16の作品解釈や美術批評活動で、どのような内容があげられているか見ると、

14. 美術作品の解釈
- ・児童は、自他の作品について自分たちの構想を伝えあう（レベル1又は小学校低学年）
 - ・児童は作品解釈を支える理由をつけて解釈を伝えあう（レベル2又は小学校高学年）
 - ・生徒は自分が見たもの（造形要素、組織化、メディアの活用）、関連する社会状況に関する情報、自分自身の経緯と視点によって支えられる作品解釈を伝えあう（レベル3又はミドルスクール）
15. 美術と地域社会
- ・児童は自分の家庭や地域で見る美術から事例をあげる。（レベル1）
 - ・児童は、人々が造ったり、集めたり、使ったり、買ったり、売ったり、交換したり、研究したり、解釈したり、展示したりするなど家庭や地域で美術とどんな関係にあるかを確認する。（レベル2）
 - ・生徒は自分の地域で美術に関係した活動に、どのように参加しているかを説明する。（レベル3）
 - ・生徒は芸術における今日的な事件に関して情報を踏まえた考察を表現する。（レベル3）
16. 美術における判断
- ・児童は、最初の印象と良く知ってからの違いを確認する。（レベル1）
 - ・児童は十分に裏づけのある解釈を認識する。（レベル2）
 - ・児童は自分が信じていることがある種の作品を他の作品よりもよく見せることを確認する。（レベル2）
 - ・生徒は、自分や他人によって与えられた解釈の妥当性について判断する。（レベル3）
 - ・生徒は、作品の優れたところや意義を判断するところの基準を自作し応用する。（レベル3）

ここであげられているレベルから批評活動を推測すると、やはり、解釈、言語化、根拠、判断基準などが含まれており、地域社会の中でそれを考えるようになっていくことは非常に興味深い。今後、アメリカでこの基準に従ってどのような学習が展開されていくのか、美術教育の動向に注目していきたい。

2.3 日本の美術教育における「鑑賞」領域の考え方

アメリカの美術教育において扱われている「批評」学習に比べて、日本ではどのような学習が行なわれているのであろうか。前述の日本の指導要録に記載されている学習評価の観点から見れば、「思考・判断」の観点は、「発想や構想の能力」としてとらえられ、鑑賞教育の内容は「知識・理解」として考えられている。しかし、美術批評は、知識・理解としてではない鑑賞

教育の重要な内容であり、クリティカルな思考と判断は、常に自己の制作活動を評価するための眼として機能し、発想段階や構想段階のみにかかわる内容ではない。

また、日本の美術教育は、「表現」と「鑑賞」という大きな領域を設定し、「つくる喜び」と「見て感じる心」からなる美術教育の目標を掲げてきている。その鑑賞領域の内容をみると、まず目標とされていることは、

- ・「かいたり、つくったりしたものなどを見ることに関心をもち、その楽しさを味わうようにする。」(第1学年及び第2学年)
- ・「自分たちの作品や身近にある作品、材料のよさや美しさなどに関心をもち、それらに対する感覚などを高めるようにする。」(第3学年及び第4学年)
- ・「作品などを進んで鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、感性を高めるとともに、それらを大切にできるようにする。」(第5学年及び第6学年)
- ・「自然や美術作品などについての基礎的な理解や見方を広げ、よさや美しさなどを感じ取る鑑賞の能力を育てる。」(中学校第1学年)
- ・「自然、美術作品や文化遺産などについての理解や見方を深め、心豊かに生きることと美術とのかかわりに関心をもち、よさや美しさなどを味わう鑑賞の能力を高める。」(第2学年及び第3学年)

このように、ここで述べられている内容は、作品をいかに味わい、よさや美しさを感じるかという受け身的なかかわりが中心になっているように思われる。こちらから作品を解釈し、分析し、比較し、判断するというような姿勢が伺えないのである。さらに、従来の美や価値観について批判的に見るができるような創造的な活動であるようには思われない。最初に今西が述べていたように、これまでの思想の在り方の自己批判であり、過去の思想が考えたこと以上に多くを見る眼をもつような鑑賞学習を今後考えていく必要があると考える。

3 イングリランドのナショナル・カリキュラムに見られる「クリティカルな思考と判断」にかかわる学習

次に、「鑑賞」領域の中で美術批評に基づく学習を行なうという考え方そのものを吟味し、表現と鑑賞の造形美術活動全体にかかわるクリティカルな思考と判断のための学習について考えていきたい。そのためにイングランドの美術 (Art and design) 教育を例にその内容を検討していく。このイングランドのナショナル・カリキュラムに基づく Art and design の授業内容について、小学校レベルのものについては既に報告¹⁹し、ナショナル・カリキュラムの改訂により変化している Art and design 教育の役割について、その特徴的な学習の内容とともに考察を試みた。ここでは、特に中学校レベルの内容をもとに、「クリティカルな思考と判断」を育てる学習としてどのような内容が組み立てられているのか、示していきたい。

3.1 Art and design 教科が目指しているもの

まず、イングランドのナショナル・カリキュラムに示されている Art and design 教科の目的と目標は、小学校 (キーステージ1.2)²⁰では、以下の4つがあげられている。

- ・視覚的、触覚的、感覚的経験や、世界を理解し世界とかかわる美術独自の方法によって、

子どもたちの創造性と想像力を高めること

- ・色彩, 形, 材質, パターンの理解と, 考え, 感情, 意味を伝えるために材料とプロセスを用いる能力を発達させること
- ・芸術家, 工芸職人, デザイナーの仕事の中にある考えと意味を探索し, 現代の生活と他の時代や文化の中での芸術, 工芸, デザインの多様な役割と機能について学ぶこと
- ・活動を通して, 思慮深い判断と美的で実際的な決定をすることを学び, 環境を形づくることに意欲的に参加するようになること

また, 中学校(キーステージ3)²¹では,

- ・視覚的, 触覚的, 感覚的経験を通して, 彼らの創造性と想像力を高めること
- ・実践的, 技術的, クリティカルなスキルを習得し, 考え, 感情, 意味を伝えるために視覚的, 触覚的言語の使用を発達させること
- ・活動を通して, 価値ある判断と美的で実際的な決定をすることを学び, 環境を形づくることに意欲的に参加するようになること
- ・芸術家, 工芸職人, デザイナーの仕事の中にある考えと意味を探索し, 現代の生活と他の時代や文化の中での芸術, 工芸, デザインの多様な役割と機能について学ぶこと

があげられている。どちらの段階でも, 日本の美術教育の内容と少し異なるのは, 思慮深い, 価値ある判断や, 美的, 実際的な決定, 環境形成, そして, 中学校段階の実践的, 技術的, クリティカルなスキルの習得である。これらの目標を受けて, Art and design 教科の学習の観点や内容が導かれ, さらに具体的な題材(個々の単元)へとつながっていく。この小学校, 中学校, 高校レベルのカリキュラムと題材をみると, その具体的な姿が伺えるのである。

まず, Art and design 教科の授業はすべて4つの部分から考えられている。それらは, 「考えの探索と発展」「美術の探求と制作」「作品・制作の評価と発展」「知識と理解」であり, 最初の3つは, そのまま実際の授業展開となる。また, 最後の「知識と理解」は全ての部分とかわり教える内容となっている。この4つの中で特にクリティカルな思考にかかわるものが「考えの探索と発展」であり, 判断にかかわるものが「作品・制作の評価と発展」としてとらえることができるのである。これらは, 作品制作の前後に位置づけられ, その意味では制作活動の一部の学習とみなすこともできるが, その内容は, 制作に重きをおいている日本の美術教育のものとは大きく異なるものである。ここでは「考えの探索と発展」領域と「作品・制作の評価と発展」領域の学年ごとの目標について最初に検討し, 次に一つの教材例をもとに, その具体的な学習活動をみていくことにする。

3.2 「考えの探索と発展」領域と「作品・制作の評価と発展」領域の目標

これらの目標は, 「生徒は教えられなければならない」という書き方になっており, 表1に書かれていることが, その内容となっている。また, 同様な内容で, レベルごとに到達目標が掲げられている。

表 1. 「考えの探険と発展」の内容と「作品・制作の評価と発展」の内容

	「考えの探険と発展」の内容	「作品・制作の評価と発展」の内容
キーステージ1	<ul style="list-style-type: none"> a. 直接的な観察, 経験, 想像から記録し, 考えの探険をすること b. 彼らの制作のスターティングポイントについて質問し, 答え, そして考えを発展させること 	<ul style="list-style-type: none"> a. 自分や他の人が行なったことを批評し, 自分で考えたこと, 感じたことを言葉で言うこと b. 現在の制作で変えられることや将来の制作へ発展させられるものを特定すること
キーステージ2	<ul style="list-style-type: none"> a. 経験と想像から記録し, 直接的観察から選択して記録し, 異なる目的のために考えの探険をすること b. スターティングポイントについて問い, 熟考した観察をし, 彼らの制作で用いる考えを選択すること c. スケッチブックの使用を含めて, 彼らの考えを発展させることを助ける視覚的情報や他の情報(例えば, イメージ, 材料など)を集めること 	<ul style="list-style-type: none"> a. 彼ら自身の制作と他の人の考えや方法やアプローチを比較し, それらについて考えたこと, 感じたことを言葉で言うこと b. 自分の見方に従って制作を適応させ, どのようにさらに発展させるか, 記述すること
キーステージ3	<ul style="list-style-type: none"> a. 異なる目的と観衆のために, 直接的観察を記録し, 分析し, 経験と想像から選択し, 考えの探険をすること b. クリティカルに討論し, 問い, そして, 視覚情報と他の情報(例えば, 展覧会, 専門家へのインタビュー, CDROMなど)から自分自身の制作のための考えを発展させる助けとなるものを選ぶこと c. スケッチブックの使用を含めて, 異なる方法でこの情報を構成し, 表すこと 	<ul style="list-style-type: none"> a. 自分や他の人の制作を分析し, 評価し, 意見を表わし, 意味ある判断をつくること b. 自分の制作を適応させ, 洗練されたものにし, さらに, これを自分自身や他の人の評価を考慮して, 発展させること

「考えの探険と発展」の内容をみると, その目標とするものは, 記録(描写)できる力, 視覚的な情報やその他の情報を自分の表現のために集め, 選択し, 用いるという方法, そして討議する力である。しかも, これらは制作として考えられている活動ではなく, 制作の前の活動として位置づけられているところに意味がある。

また, 「作品・制作の評価と発展」の目標であげられていることは, 言語化できる能力を大事にし, その内容は, 考えたこと, 感じたこと, 自分の見方, 意味ある判断であることがわかる。

ここであがっているスターティング・ポイントとは, 自分の学習の意味, 発想の出発点を子どもたち自身に意識させるために必要なものであり, 常に, 時代や文化を越えて自分の制作を相対化させ, そのための情報収集, その過程で視覚言語を使用するためのスキルを身につけるよう考えられている。このことは, 自分と世界にかかわりを考える美術学習の最も大事な点であると言える。

3.3 クリティカルな思考と判断を学ぶ学習内容の具体例

ナショナル・カリキュラムで示されている目標に対して、具体的にどのような学習が設定されているのか、さらに見ていきたい。ここでは、中学生の授業としてあげられている題材、単元「9C：個人の場所、公共空間²³」をとりあげていく。環境形成が Art and design 教科の大切な目標の一つにあげられていることから伺えるように、このような子どもたちの身近な環境をテーマにした題材はすべての学年で一つずつ設定されている。この「9C：個人の場所、公共空間」は、日本の中学校2年生の題材に相当し、全10～15時間の単元である。まず、授業の流れは、他の題材同様①「考えの探険と発展」②「探求と制作」③「制作・作品の評価と発展」という順序で設定され、①「考えの探険と発展」は5項目から成り、その後「探求と制作」に移り、そのあとに、③「制作・作品の評価と発展」へとつながっていく。具体的にその学習内容みると、

①考えの探険と発展(1)

- ・ねらい 基準（コード）と慣例について学び、それらがどのように美術、工芸、デザイン作品の中で、考え、信条、価値を表わすために用いられているか、学ばなければならない。
- ・活動 公的な生活の中で、考え、信条、価値を表わす方法を特定し確認する。例えば、公共建築のための壁画、礼拝の場所の装飾、公人の像、戦争の英雄の記念碑など。

ここでは、公的な空間にふさわしい芸術作品の在り方に気づき、表現意図と実際の作品の関連を理解するような学習となっている。

①考えの探険と発展(2)

- ・ねらい クリティカルに討議し、問いかけをし、個人の制作のために視覚的或いは他の情報から、考えを発展させられるものを選択することを学ばなければならない。
- ・活動 地域のための作品をつくることについて説明を受ける。
その制作の目的について討議する。例えば、学校やコミュニティの特定な場所に注目されるものを描く。
地元の企業や工場から特定された、あるいはシミュレーションされた委託に応じること。

ここでは、具体的な例を基に、様々な情報の中から自分に必要なものを選択することで、また、それを討議することで、共通に考えるためのスキルが身に付けられるよう考えられている。特に、制作の目的を討議することは、個人の表現と公的なものの両方から考える方法を学ぶこととなる。

①考えの探険と発展(3)

- ・ねらい 直接的な観察から記録し、異なる目的や周りの人のために考えを発展させることを学ばなくてはならない。
- ・活動 ローカルエリアのパブリックアートのリサーチを行ない、多様な方法で、例えば、ドローイング、写真撮影、ビデオ録画、その場所の歴史のメモ、住民の視点など、情報を記録する機会を持つこと。
視覚的情報やその他の情報をスケッチブックに集めること。
ローカルエリアにあるパブリックアートについて何が意義深く価値があるか、自

分自身の観点を表わす情報を選び、記録すること。

熟考された視点にたどり着くための矛盾する根拠について討議し、評価すること。

ここでは、リサーチをし、それを多様な方法で記録することで、自分の考えを変えたり修正したりする助けとすることが考えられている。

①考えの探検と発展(4)

・ねらい アーティスト、工芸家、デザイナーの役割、目的、大衆について、その継続性と変化について学ばなければならない。

・活動 違う時代と異なる文化からパブリックアートの例を見る。
どのように精神的、文化的、社会的信条が表われているか、討議する。例えば、アフリカの美術、エジプトの美術、ギリシアの古典建築と彫刻など。

近代後期の芸術家が公共スペースに貢献したいくつかの方法を見る。

多様な実践例について討議し、違う時代と異なる文化における芸術家との関係をつくる。

他の人の制作についてリサーチする。

他の制作の中に、異なる考え、方法、アプローチを確認し、分析する。

現代的実践の違いについて問題をとりあげる。

ここでは、違う時代と地域のパブリックアートについて調べ、討議し、いろいろな例から異なる考え、方法、アプローチについて学ぶ活動となっている。

①考えの探検と発展(5)

・ねらい 異なる方法で視覚的情報や他の情報を組織し表わすことを学ばなければならない。

・活動 自分のリサーチワークの縮小したプレゼンテーションを準備すること、例えば、スケッチブック、小さなディスプレイ、短いビデオ、スライド・テープのプレゼンテーションなど、自分の考えや個人的反応を示すもの。

彼らが表現したようなローカルエリアの中のパブリックアートの考え方について討議する。

生徒個々の考えの「形成的評価」を行なう。

ここでは、プレゼンテーションを通して情報を伝えることについて学び、個々の考えの形成的評価を行なうことが求められている。そして次の段階である「探求と制作」の学習になり、その後「制作の評価と発展」の学習内容となる。

②探求と制作 ここでは、実際に置く作品や環境デザインの模型を共同でつくり、それらを設置場所にシミュレーションし、公開するという学習時間が設定されている。

③制作の評価と発展

・ねらい 自分自身と他の人の作品や表現方法を分析し、評価し、根拠ある判断をつくることを学ばなければならない。

自身と他の人の評価をもとに、制作や計画を適応させ、特定し、さらに発展させることを学ばなければならない。

・活動 (1)幾つかの明確な評価の基準を開発する。

ペアになって互いの制作について基準を使って評価する。

他の人によるコメントとワーキンググループの中での討議の内容でメモをつくる。

- (2)どのように意味ある考えや問題が互いの制作に向けられたか、討議する。

制作の中でどのように、考え、信条、価値が伝えられているか。

どれくらい効果的に視覚的で材質的な質（特性）が用いられているか。

どんな方法と技術が使われているか。

どれくらい効果的にこれらが使われたか。

どのようにその制作は、見られる目的や文脈と関連しているか。

その制作に対する自分の見方は何か。

何故、そのような見解を持つか。

- (3)共同制作の「総括的評価」を書く。

体系化されたパラグラフによる首尾一貫した評価をつくる。

文の中で正確に関連と接続がなされ、しっかりと論じたものを書く。

- (4)共同制作の中で、変える必要があるものについて、熟考した決定をするために、フィードバックを用いる。

- (5)学校と地域の組織、例えば、都市計画部、地元企業や工場と、生徒の提案やデザインの考えの反応をフィードバックするために E-mail による交流が可能かもしれない。

ここでは、評価の基準をつくり、総括的評価を行ない、それらを今後の制作のためにフィードバックし、公開していく学習が行なわれている。

以上のように学習全体の流れをみると、「考えの探検と発展」の段階では、まず、生徒の考えを広げ、発展させるために、様々な視覚言語を用いた方法で試みさせ、自分の考えを明確にしながら、作品をつくっていくような学習が構成されている。しかも、その過程で、アーティストの作品を取りあげ、作品の鑑賞活動を含めた学習になっているわけである。そして、その後、学習活動は、②探求と制作の活動を行ない、③評価と発展へと続き、その過程でさらにクリティカルな思考を通した評価活動が行なわれ、自分の判断を形成するための様々な方法を用いながら、次へと発展させていくものになっている。

3.4 クリティカルな思考と判断にかかわる学習活動のまとめ

自分で表現したり、つくったりする活動には、思考する過程や判断する場が必ず含まれている。しかし、その思考の過程を吟味したり、判断の質を問題にするような自分自身の批評的な学びが成り立つことを考えていかなければならない。それを常に自分自身で行なうことができるために、学校の美術学習の中でどのような学習を設定し、子どもたちが身につけていくべきなのか、具体的にまとめてみたい。

まず、本研究で取りあげてきた「クリティカルな思考」は、子どもたちが自分で問題解決を行なっていく上で不可欠のものである。しかし、独りよがりの考えではなく、常に自分の考えを（他の人の考えや作品や、過去の時代や他の文化について調べる中で）比較したり、分析したり、相対化させ、そして、それを人に説明でき、さらにその時、別の見方や考え方を取入れ

ることのできるような、自分自身の考えもクリティカルに検討できるようなものを指す。それは、自分の考え、信条、価値について異なる観点から見ること、その根拠を考え出せること、意見を交換すること、描写すること、質問すること、コメントすること、説明すること、などの活動を含むものである。

そして、このような自分自身と他のものに対しクリティカルに見ることのできる探求的な姿勢、態度が、判断の質を高めていくことにつながっていく。特に多くの情報を伝達することが必要とされる今の教育システムの中では、情報を判断する眼を養うことも大切であり、視覚的情報を扱う美術活動は、その眼を養う意味で重要な役割があると言える。

さらに、自分の判断が適切かどうか、それを人に話したり、視覚的に表現したり、空間の「言葉」などをうまく利用し表現したり、記述したりすることを通して、自分の持つ判断の基準を常にフィードバックしていく必要がある。

また、討議するという活動も評価能力を高めるために必要であり、その言語化能力に加えて、説明することができるための情報収集や他の人の考えを受け入れることのできる柔軟な姿勢などが求められる。これらの学習活動を各単元の目標や実際の状況に合わせて、取捨選択し、学習活動として成り立たせることが大切であろう。

4. おわりに

美的判断、造形思考など、思考や判断についての内容が今まで美術教育の中で全く取りあげられてこなかったわけではない。しかし、日本の美術教育の目的を見ると、学習指導要領が示す「表現及び鑑賞の活動を通して・・・豊かな情操を養う」となっていることから伺えるように、美しいものを見せて、つくらせて、美しい心を育てるといった感覚的、情緒的内容にかかわるものである。造形活動の中にどれだけ重要な思考や判断の活動が組み込まれており、それを子どもたちが意識的に高めていくことはどれほど重要なことか、そして、我々の共有する造形美術の遺産はそのために多くの情報を与えてくれることを再認識していく必要があると考える。

美術批評の歴史が浅い日本においては、鑑賞教育において作品から様々なものを読みとり、解釈する学習は重視されていても、子ども自身の考えや判断を求め、異なる意見を尊重し合い、さらに新たな思考や判断を導くような学習はほとんど行われていない。今後、子どもたちの判断も含めた批評活動のあり方を研究し、実践に結びつけていくための研究を行っていく必要がある。そのために、今回取りあげたイギリスの美術教育の中で行われているクリティカル・スタディは1つの考え方と方法を示すものとして重要である。このように子どもたちのクリティカルな思考と判断を可能にさせるような美術教育のあり方を考えていくことは、教育全体の中で大切な役割を果たすこととなるだろう。

注および引用文献

- 1 阿部靖子「美術教育におけるクリティカル・スタディについて」上越教育大学研究紀要第25巻第2号 2006 pp.427-441
- 2 今村仁司 『作ると考える』 講談社現代新書 1990 p.24

- 3 世界美術辞典 新潮社 1985 p.2000
- 4 同上書
- 5 ジョセフ・ダラコット『美術批評入門』スカイドア 1995 p.19
- 6 川田都樹子「美術と批評」『芸術学ハンドブック』1989 p.199
- 7 同上書 pp.204-205
- 8 石川千佳子 「『美術批評の方法論』 - Becoming Human Through Art にみる批評の方法論とその実践について - 宮崎大学教育学部紀要 第56号 1989 p. 1
- 9 木下長宏 「『批評』の経験」『美術のゆくえ, 美術史の現在』平凡社 1999 p.131
- 10 同上書
- 11 前掲書4 p.25
- 12 E.W. アイスナー 『美術教育と子どもの知的発達』黎明書房 1986 p.86
- 13 同上書 p.132
- 14 〃 p.162
- 15 〃 p.143
- 16 〃 〃
- 17 山本朝彦「美術教育と批評 - 美術教育思潮と批評の関係」『美術教育学』第22号 (美術科教育学会誌) 2001 p.299
- 18 ふじえみつる「全米美術教育基準の成立とその課題について」『美術教育学』第25号 (美術科教育学会誌) 2004, pp. 383-397
- 19 阿部靖子「イングランドの小学校における美術教育と環境造形学習」上越教育大学研究紀要第25巻第1号 2006 pp. 185-198
- 20 Department for Education and Employment & Qualification and Curriculum Authority , The National Curriculum (Handbook for primary teachers in England Key stage 1 and 2) , HMSO and QCA, 1999
- 21 Department for Education and Employment & Qualification and Curriculum Authority, The National Curriculum (Handbook for primary teachers in England Key stage 3) , HMSO and QCA, 1999
- 22 Department for Education and Employment & Qualification and Curriculum Authority, Art and design, The National Curriculum for England Key stage 1 - 3, HMSO and QCA, 1999 pp. 16-20
- 23 QCA, Art and design Teacher's guide (A scheme of work for key stage 1 and 2) , QCA, 2003

A study on the “critical thinking and judgment” in artistic learning

Yasuko ABE *

ABSTRACT

The purpose of this paper is to investigate the “critical thinking and judgment” in art learning, and to explore methods and approaches which enable pupils to develop a critical thinking and judgment.

Young people need to be able to make informed value judgments about aesthetic and design qualities. To be able to do this, they need to develop skills of analysis, interpretation and evaluation as a basis for making judgments.

I think that the experience of pupils in art studies should be a combination of practical, theoretical and critical work. So we need to determine the basic teaching materials to develop the critical thinking and judgment about Visual Art in Japanese art education.

* Division of Art Education: Department of Art and Craft Education